

有識者懇談会議事録

会場：F-BICC 1階大会議室 101

日時：2025年6月11日（水）10：30より

（事務局より資料2、3、4、5に沿って説明）

（小沢座長）

それでは委員の皆さんからご提案をいただけたらと存じます。

前川委員からお願いします。

（前川委員）

資料2で、第5ゾーンの強化を懇談会の度に申し上げてきた。これに関し2つ申し上げる。福島県伝承館のゴールは何かというと「二度と原発事故は起こさない」、そのためにどうするのか、原発の賛否とは別に、それを考えられる場所になっていかなければならない。第5ゾーンでの設置を考えていただきたい。

フランスの国立科学研究センターが福島大学と共同研究所をつくる。そこでの考え方は福島の教訓を踏まえた科学技術、すなわち RRI（Responsible Research & Innovation、（※責任ある研究とイノベーション））をベースとするものである。世界中の研究者がここに来て研究者の責任というものを考え、その上で研究の方向性を考えられる場所が伝承館であるような。福島県でしかできないもの、それを是非第5ゾーンに持ってきてほしい。そのためのワーキンググループを作るのなら参加したい。それを考えていただきたい。

それを踏まえて、なにか教訓にかかわるシンボリックなもの、例えば、世界の終末時計のようなもの。「最後の原発事故から何日」「廃炉まで何日」「県外搬出まで何日」カウントダウンするなど。一緒に写真を撮って何か考えさせるものを5周年に間に合えばと思った。細かい点だが展示において「どこがポイントか」を示すもの、スタッフがいればお話するだろうというところを、文字としてなにかあればよいと思った。

事業評価委員会は辛口の方を加えていただき、伝承館を素晴らしいものにしてもらいたい。

（青木委員）

兎にも角にも14年経った。この年月、時間の経緯によって色々なことが変わっている。その中でどうやってそれを「二度と原発事故を起こさないんだ」という大事な観点の中核になるものを皆で共通意識をもちながらも現状はどんどん変わっていつている。その現状をどう考えるかといったようなことが伝承館の中での研修講演やその後のワークショップであり、展示を見た後にそれぞれが考える課題を持って帰るというのが伝承館を訪れる人の

一番大事なものだと考えている。ここで正解は得られない。問題を持ち帰り、考えていかなければいけないことがとても重要である。特に入館する人たちの大半が修学旅行、教育旅行のような学ぶ世代の人間であるということを思うと、ここで何か答えが得られるものではない。今、廃炉に向かってどうなっているか、ただそれを観て「ああそうなのか」と思って帰ることでもなく、もっとその数やもっとその後ろにある問題をもっていかなければならないものだと考えている。展示を見た後の講演、ワークショップ、そういった点をより一層宣伝するか、それらに取り組んでもらえるようなプログラムを組めるようにすることが大事なのではないか。

8町村、それぞれの町が一生懸命、今、町づくりに向かっているし、いろんな速度があったり歩き方の違いがあるが、外から見ると双葉郡はそれぞれの町が綱引きをしているように見える。建ったものは大々的に宣伝されるが、それぞれの町が今、どのような町づくりをしようとしているのかという方が長期化する原子力災害の影響の中で一番に上げなければならない問題なのではないかと考えている。8町村それぞれに町づくりのワークショップが開かれたり、検討委員が開かれたりしている。速度こそ異なるが、そこでそれぞれの町のおこし案というのが出てきていると思う。しかし、町の中で誰がそれをやっているのかと言ったら現在町に住んでいる人々である。人口の推移などを数で出しているが、その数の内訳が何なのか、例えば避難してから帰還した人間の人数がどれぐらいの割合なのか、一時的に住んでいる人間がどれぐらいの割合なのか、また、移住してきた人間がどのくらいいるのかといった各所の町の現状、そういったふるさとや地域に対する距離感や価値観の違いのある人間が今、どうやって同じベクトルにすり合わせようかと各町が苦悩している。その現状こそ伝承館の何処かで表すべきである。ただ、学校による人口推移を提示したとして、学校の数だけ出したとしても小中学校はどんどん復興しているが、高等教育を受けられる場が無い。それに関してはどう考えているのか、そういった教育的なことに関してももう少し展示の中にそういう問題を考えられるものが入った方が良いのでは。展示で難しいのであれば、是非見学の後には話をするなり、企画展の中でそういったものを取り上げる、町の当事者たちを集めて話し合い、シンポジウムを行う等のもう少し町の現状を何処か感じられるようなものが伝承館の中にあっても良いのではないか。現在、伝承館はきれいに整っているが、実際にはこの地域はまだきれいに整っていない。それを考えたときに、町づくりの取り組みを住民の実態から見えるような場が第4ゾーンに少しでもあれば望ましい。

あくまでも大切なのは市民の目線を失わないことである。この地域の人々の顔が見えるアーカイブにして欲しいと考えている。

(鞍田委員)

-ing の施設であるため、ああいったデータであったり更新は大きな意味をもつ。青木委員が言ったように内実までどのようにして見せるのか非常に難しい施設であるということを改めて感じた。

他の地域（県内に限る）での存在感がどうなのかという危機感、懸念はずっとある。8町村がばらばらに施設を作ったり、イノベが産品をいろいろと作ったりしているが、そろそろ双葉郡全体あるいは浜通り全体の姿をまとめて見せる段階に来ているのではないか。総合的なアピールというものも必要。他の施設との連携、協力体制を強めていき、全体でしっかりアピールしていくことで現状の姿の違いや復旧・復興のスピード感も異なっているといった違いが見えてくる。そういった全体の姿が見えないのは勿体ないと感じている。

人の往来や人流に関わる仕事の人たちにどの程度伝承館の存在をアピールできているのか。現に来客を受けている人々への落とし込みがどうなっているのか知りたい。双葉郡の十数年刻々と変わっている姿を見てもらいたいと考えている。伝承館や請戸小を案内しているが、前述した仕事の人々（ホテルマン等）がどのように考えているのか非常に不安である。実際に数字で人が増えるのは好ましいが、実業として関わっている人々への落とし込みをもう少し強めた方がよいのではないだろうか。

南会津に沖縄のエンターテインメントを持ち込んだ「郷人（ごうじん）」という団体がいる。そこで取り上げているものは南会津の歴史に関わるもの。そういったものを舞台に落とし込んでおり、非常に質が高い。多少の出入りはあるものの、子供たちも関わっている。

自分たちの地域の在り様を芸術作品のようなものに表現し、全国キャラバンを行う等すればこちらからの情報発信のツールになり得るのではないか。歴史と子供たち、人と地の循環のようなものができれば好ましいのではないか。福島県内のマスコミもうまく使ってほしい。

（守岡委員）

R7年事業計画の概要の基本方針の視点から戦略的にどういった国の方が来館しているのか、どういった層の来館者が来ているのか、重点的に働きかけをするのが重要だと考えている。インバウンドの来館者の出身国のデータを知りたい。

展示の関係としては時間的な制約がある中で伝承館らしさを分かってもらえるのかが重要な点だと思う。例えば各展示ゾーンの最後にクエスチョン形式（3択形式）を用いて重要なポイントを問いかける等を準備する。すべて回答した来館者にステッカーを渡すのも良い。重要なのは決められた時間の中で自分事として教訓をもち帰ることができるような来館者へのアプローチである。

8町村のそれぞれのステージは様々である。住民に近しいのが伝承館の特徴である。例えば地域の語り部等のリアルな情報が伝承館には入ってくる。他の施設の関係、住民に対する効果、教育関係施設の在り様、インフラの在り様等、8町村の在り様も地元の日線や様々な知見、伝承館の知見について研究して、それぞれの自治体では言えないようなことも提言できるのではないか。

(県教育委員会より代理出席、教育総務課長 榎木 渉氏)

県民に対しての教訓、継承。

県民の中でも風化が進んでいるという話があり、これまでの会議でも議題に上がったが、小中学生はほとんどが震災以降に生まれた子供たちである。また、新卒の教員も当時は小学生。そういった状況の中で、新卒の教員も当時のことをあまりよく知らなかったり、覚えていなかったりする。さらに教員は県内全域を回るため、浜通り出身ではない教員が浜通りで教鞭をとることもある。子供たちと教員の方々にもこれまでと今とこれからといった所を伝えていく意義があると考えている。

子供たちが自然と目を向けられるような展示という観点。

小中学生は文字を見るよりも物に触れ、立体物に目を向ける傾向がある。特に小中学生は視覚と記憶がよく結びついているのではないかと考えている。そういった子供たちの目線に沿った展示がもう少し出てくると良いのではないかと考えている。

県外からの学校団体が教育旅行で訪れる場合、伝承館以外にはこういった場所に向かうようパッケージしているのか。

(清水副館長)

県外の学校のルートは予約の段階で伝承館来館前後の日程を把握しているケースはそれほど多くないのが実態である。伝承館を経由して南下していく学校もあれば、来館後そのまま県内で一日を過ごす学校もある。伝承館で過ごす場合、展示見学、フィールドワーク、語り部、ワークショップとフルパッケージを受講する学校団体も存在する。その後に何処に行くかはあまり把握していない。

ルートは多種多様であり、一概には言えないが、伝承館を訪れる学校団体は伝承館のみではなく、県内であともう 1、2 か所何処かしらに立ち寄るイメージがある。

(前川委員)

ホープツーリズムの関係でも伝承館と請戸小学校、双葉町の街中、浪江町の街中等の組み合わせで 1 日のパターンと、子供たちの希望に沿って中通りと会津の子供が興味を持ちそうな場所を回ってから伝承館（浜通り）も追加するというパターンが多い。

(青木委員)

修学旅行といった大事な行事で伝承館を選んだ学校の 8 割程度が引率してくる教員の意識によるもの。そういった学校の場合は話が終わると引率の教員からお礼を言われるケースが多い。子供たちを何処に連れていくかは教員の意識の占める割合が大きいため、その世代に向けての周知を図っていくべき。

(鞍田委員)

中学生や高校生の修学旅行は何が教訓に残っているかを考えると、お楽しみの部分や悪いことをして教員に叱られたこと等は覚えているが、しっかり学んだことはあまり覚えていない傾向がある。伝承館のみがメインだと子供は息が詰まり、楽しかったという思い出が残ってくれるか不安が残る。今、浜通り全体で感じるのは何故選ばれにくいのか。前述したようなお楽しみの部分が足りないからではないだろうか。学びにのみ偏ると堅苦しくて魅力のない、大事とはいえずらさを感じる土地になってしまう。これについては教員も同様の感じ方。バランスが大事ではないか。

トータルとして見るともう少し余白(魅力)の部分をどう作るを考えてもよいのではないだろうか。

(守岡委員)

修学旅行の行先については教員の考えによるところはあるが、最近では子供たちにアンケートを取って決定するケースも増えている。そういった中でツアーを組むときはアクティビティといった子供たちが楽しめるようなものを考え、浜通りだけで完結するのは難しい。そういった場合は中通りや会津も含めて総合的に提案行っている。楽しみにプラスして教訓的なところを合わせ技で実施するのが教育旅行なのではと考えている。

海外では影の部分だけが誇張されて報道されがちのため、福島県に行くのを反対する保護者は今も多くいる。この地域に来てもらい、現場を見て、話を聞いてもらい、それを周囲に伝えてもらうことが大切なのではないか。まず来てもらうことが重要。

(青木委員)

まず、先の話について少しだけ言わせて頂きたい。今の修学旅行は思い出作りではなく、これから生きていく人生の課題づくりとされている。そのような観点で選んでもらっている中で、生徒たちの心に残るもの、娯楽施設とはまた違う興味や関心といった楽しさを与えられるのが伝承館だと考えている。それに語り部は対応していくべき。体験を語るだけではなく、このことがあったことによって、どんなことを今考えているのか、考えられるようになったのか、そういった語りかけをすることによって子供たちの中にある学ぶ楽しさにアプローチする形に福島の語り部はスキルアップしていく必要がある。

その意味で語り部がネットワークを組むことでお互いに切磋琢磨していくことができるような場にしていきたいと思っている。伝承館も独自に語り部研修会を行っているが、今後、それらのすり合わせをしていく必要があると考える。伝承館で体験語り部をしている人間は伝承館所属の語り部となるが、組織的にはその他の団体の語り部である二重所属のケースがある。それを整理したいと考えている。福島の語り部はどこにも負けない日本一素晴らしい語り部なのだといわれるようにしていきたい。そのための組織づくりを伝承館と行っていきたい。

(座長、小沢委員)

伝承館を中心として関与だったり連携だったり、協力だったりとの意見が多く出ている。中でも海外への取り組みについては伝承館の取り組みを外に広げるための非常に大きなキーになってくると考えている。実際に学べる、復興の過程を学べるといった形での伝承館の活動を研究員の方向性や外国人来館者が増えてきたときの伝承館の影響の与え方として考えてほしい。

(清水副館長)

サービス業関係者に対する PR に関して、ある程度は行っている。ただし、各施設徹底してパンフレットを置き切れていないところがある。パンフレットをお願いしている所とお願いしていない所を洗い出し、パンフレットを置いてもらえるかどうか検討していきたい。外国人の出身国の把握について、伝承館でアンケートや聞き込みはまだ行っていない。日本人か日本人以外かを言語や見た目を確認し、受付でカウントして積み上げている状況である。

(池田課長)

英語のリーフレットの消費が一番多いため、英語圏の外国人来館者が多い状況。次に多いのは繁体字であり、台湾からの来館者と推定している。韓国からの来館者は少ない。

(清水副館長)

昨年度まで誘客活動は県外を中心に行っていたが、今一度まず県内の子供たちの命を守る、地震による怪我を少なくするために伝承館に来て欲しいとのことで県内の中学校高校をメインに誘客活動を集中して行っている。

(清水副館長)

大変貴重なご意見ありがとうございました。

今後の伝承館運営改善に着手していきたいと思っております。

最後に高村館長から一言お礼の挨拶を申し上げます。

(高村館長)

本日は非常に貴重なご意見を賜り、本当にありがとうございました。

頂きましたご意見は今後この館の運営の参考にさせて頂ければと思っております。今年の9月で伝承館が開館して5年になります。この5年間、やはり我々の周りの環境も変わっていきました。先程、連携の話がありましたけども、例えば浪江には F-REI ができました。昨年には大熊町の大野駅周辺の再開発ができて中間貯蔵施設の新しい施設ができたりとか。そういったなかで連携するパートナーもやはり我々変わってきていると思っております。一方で先程ご指摘がありましたが、私たち伝承館というのは被災した双葉町にあるという

ことで被災した地域、被災した住民の方々と非常に近い関係にある機関でございますので、地域の住民の方、或いは地域の自治体、そして今言ったようなキープレイヤー、様々な連携機関と今後ますます連携しながら震災の記憶・記録と教訓を伝えていくのを進めてまいりたいと思っております。また、懇談会についてはこれで最後になりますけども、引き続き委員の先生方におかれましては大所高所から伝承館に対するご意見を賜れればと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

どうも、ありがとうございました。